

4年1組

石を見つめて② ～石の世界を広げていく子どもたち～



石で描くと ～石の感触・色・形・大きさ・模様から～

子どもたちが総合の時間に見つめている石を使って図工の授業を行いました。教師が用意した海の石。第1時では、子どもたちが石の色をより感じることができるようにと願い、その石にオリーブオイルをつけました。

第2時が行われる日の朝、試作した手作りの額にたくさんの石をのせて教室に置いておくと、朝や休み時間にその石を並べて遊ぶ子どもたち。休み時間が終わると、額の前に集まった子どもたちが、「先生の顔描いたよ」と言って

絵を見せてくれました。「見て、鼻は立体的でしょ。ちょうどいい石があったんだ。髪の毛は全部泥岩にしたよ。先生白髪が多いけど、全部黒にしておいてあげたよ(笑)」と、そこに置いた石の意味を説明してくれました。その石の特徴を考えながら置いていく子どもの行為がとても面白いと感じます。授業冒頭、第1時の振り返りで、Hさんが綴っていた【今日の図工すごかったです。オイルをつけると石の色がはっきりして、ぬれているみたいでとてもきれいでした。あと、二つの海のでひろった石をくらべるとまるっこいのとカクカクで形がちがうからなんでちがうのか知りたいです。石の形と色をうまく使ってつくりたいです。】という言葉全体を紹介し、「みんなならこの石でどんなものを描けそうかな」と伝えて授業を始めました。



石を分けて並べて始めたAくん。「Aくん、面白いことしているね」と伝えると、Aくんは「色分けしているの。こうしておけば後で使いやすいかなと思って。あとさ、色によって感じる感じが違うから」と語りました。また、Kくんは、「先生、俺ね、ちょっとね、『口』にこだわった。見て」と言って、自分の席に連れて行ってくれました。Kくんが描いていたのは顔でした。その絵を見せながら、「これさ、この石(横に置いてある石)見て驚いている口だよ。俺がさ、フォッサマグナミュージアムに行って、こうだった(驚いた)から。この石の形見て。驚いている口に見えるでしょ」と語りました。子どもたちが語る言葉からは、石へのこだわりや、石の中の色や形を使って自分の表したいことを表現していくことができるという石の新たな魅力を感じていることが伝わってきました。

思い思いに石を並べている子どもたちに、「みんなが石で絵を描くための額を作ろうと思っているんだけど、これくらいの大きさでどうかな。いいよって言う人は手を挙げて」と、試作した額を見せながら伝えると、大半の子どもたちが「それくらい大きいじゃないと困る」「その大きさがいい」「本当はもっと大きい方がいいけど」と言いながら手を挙げていました。「もうちょっと小さい方がいい人っている」と聞いてみると、何人かが小さく手を挙げていました。しばらくしてから、「小さい方がいい」と手を挙げていたHさんに「さっき額がもう少し小さい方がいいって手を挙げていたけど、あれってどういう思いがあったのかな」と聞いてみました。すると、「なんか、色がなくて少なくてほしいから。ぎゅうぎゅうに詰め込みたい」と答えるHさん。私は、「そっか、そういうことね。Hさんの思いが分かったよ。あの試作した額と比べてどれくらいの大きさがいいんだろう。ちょっと一緒に見てみる?」と伝え、黒板の前にある額のところへHさんを連れていきました。そして、そこに描かれている友が描いた絵を見ながら、「この絵の体のところは詰め込んであるじゃん」とつぶやくHさん。教師は、



「ああ、そっか、こうやって詰め込んでいる感じが好きなんだね。じゃあ顔も埋めてみようか」と伝え、隙間のある顔の部分に石を入れていきました。ある程度顔の部分が石で敷き詰められていくと、Hさんは、「そう、こんな感じで埋めていきたい」と言いました。

子どもたちが見ている世界はいつも素敵だなと思います。子どもたちは、石で描こうとする中で、その感触・色・形・大きさ・模様などから、様々なことを感じています。これまで石を見つめ続けてきた子どもたちだからこそ感じる世界。石の選び方、石の置き方、その一つ一つに、その子の思いが表れてくるように思います。

しかし、絵というと、どうしても出来栄に目が行ってしまいがちです。大人になるほど、そうした目で見る事が多くなってしまわないでしょうか。私は小学校時代、図工の時間に友達と腕相撲をしている場面を描きました。なぜか全員腕相撲の絵だったのですが、なぜそれを描いたのかは覚えていませんが、クラス全員の作品が飾られたことは今でも鮮明に覚えています。嫌でも比べてしまう友達のすごい作品。それからずっと絵は苦手でした。絵を描くとは、子どもにとってどんな意味があるのか。

今、子どもたちが描いている姿を見てると、他の人から見れば何を描いているのか分からなくても、そこには一人一人の思いやこだわりがあります。以下は、子どもたちのある日のふり返りの言葉です。

- ・いろいろな色の石を使って、色々な色の空をえがきたいです。なぜなら、石にはたくさんの色があることを知ったからです。石の色をたくさん使いたいなと思いました。でも、えがいているうちに変わるかもしれません。
(Hさん)
- ・紅葉している木をかきたいです。理由は、何をかくか決まっていないうちに、外を見て紅葉している木があったから、これにしようと思いました。すごくきれいだと思って、石だとどうなるんだろうって思ったからです。
(Sくん)
- ・私は石の形、色に注目してえがきたいと思いました。例えば、石が始まった山をかくとしたら、でこぼこでいろいろな色が入っている石を使ったらさらに「山」に見えてくるし、石の特ちょうなども感じていられるからいろいろな石を使って表したいなと思いました。私は、石の道の山川海をかきたいです。(Nさん)
- ・これまでいっしょうけんめい石をみがいてきたという思いをえがきたいなと思ったから、「光っている国」というタイトルでえがいています。色分けしてえがいてみたらとてもきれいになりました。(Mさん)

その子の一手一手には意味があります。そう思いながら子どもたちを見てると、一人一人の描いている姿がとても愛おしく思います。やはり、大切なのは出来栄ではなく、描いている過程だと思うのです。

先日の社会科見学に行くバスの車内でのことです。見学地へ向かうバスの正面に、太陽に照らされる山が見えました。それを見たKくんが「うわー。山きれい！これ石でかきてー！！」と大きな声で言いました。「描きたい」という思いが子どもたちの中に生まれてきていること、素材である石が描くことの対象となっていることは、私にとって、とても嬉しい言葉でした。また、こんなこともありました。木の描き方に悩んでいるZくんには私は「一度外に行って木を見てきたらどうかな？」と伝えました。すると、「いや、再現したいんじゃなくて表現したいからさ」という言葉が返ってきました。子どもの言葉・行為には驚かされてばかりです。子どもの描いている過程、そこにある豊かな表情を見つめながら、共に描く楽しさを味わうことができ、本当に楽しい図工の時間になりました。

また一つ、私たちの中で石の世界が広がったように感じます。

